

研究題目

ユネスコスクールとしてのE S Dの取り組み
～統合後3年間のE S D実践の記録と未来へ～

目 次

- 1 はじめに
 - (1) ユネスコスクールの認定
 - (2) E S D教育

- 2 本校におけるE S D教育の実践について
 - (1) 国際交流分野
 - (2) 環境・防災教育分野
 - (3) キャリア教育分野

- 3 おわりに

千葉県立市川昂高等学校 校長 柴田 淳

1 はじめに

千葉県教育委員会が平成14年11月に策定した「県立高等学校再編計画」の第3期実施プログラムにより平成23年度、旧市川西、旧市川北高校が統合し、新生市川昂高等学校が誕生した。第3期実施プログラムでは、その目指す学校像として、基礎的・基本的な学力の充実等を図るとともに、キャリア教育にも積極的に取り組むことを明示している。これを受け、生徒一人一人の進路に対応できる学力、また基本的な生活習慣や規範意識を身に付けさせるとともに、部活動に積極的に励み、命を尊重する心、感謝する心を持つ生徒を育てること、そして教職員が一つになって、地域とともに歩む学校を目指している。

校名の「昂」は、多くの星が集まる「昂」のように生徒が集い、互いに高め合うことを象徴している。一つ一つの輝きが星団「昂」となって、一層きらめくように、統合を機に市川の地で明るく輝き、夢をはぐくむ学校になって欲しいとの願いを込め、本校の地名を示す「市川」の後に、「昂」を付したものである。

現在3学年全日制、普通科1学年8クラス、生徒数972名が学び、統合後3年を経て、ようやく今春4月に「昂」ブランドの生徒がそろい、今年度末に新生市川昂高校に入学した第1回の卒業生を送り出すところである。

(1) ユネスコスクールの認定

本校は前身である旧市川西高校時代の平成22年7月9日、学校経営の柱としてユネスコスクールの認定を受けるとともに、県内公立校では初めての認定校となった。ユネスコスクールは、昭和28年、ASPnet (Associated Schools Project Network) として、ユネスコ憲章に示された理念を学校現場で実践するため、国際理解教育の実験的な試みを比較研究し、その調整をはかる共同体として発足したものである。本年60周年を迎え、世界180カ国で約9,000校がASPnetに加盟して活動しており、日本国内でも、平成25年7月現在、583校の幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び教員養成系大学がこのネットワークに参加している。日本では、ASPnetへの加盟が承認された学校をユネスコスクールと呼んでいる。ユネスコスクールは、そのグローバルなネットワークを活用し、世界中の学校と交流し、生徒間・教師間で情報や体験を分かち合い、地球規模の諸問題に若者が対処できるような新しい教育内容や手法の開発、発展を目指しているものである。

(2) ESD教育

ESDとは、持続発展教育(ESD: Education for Sustainable Development)と訳されており、私たちとその子孫たちが、この地球で生きていくことを困難にするような問題について考え、立ち向かい、解決するための学びであり、持続可能な社会の担い手をはぐくむ教育である。このESDの実践には、特に次の2つの観点が必要となる。



市川昂高校校章

- ① 人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性をはぐくむこと。
- ② 他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「かかわり」「つながり」を尊重できる個人をはぐくむこと、そのため、環境教育、国際理解教育等の持続可能な発展に関わる諸問題に対応する個別の分野にとどまらず、環境、経済、社会の各側面から学際的かつ総合的に取り込むことが重要である。

2002年の国連総会において、2005年から2014年までの10年を「国連持続可能な発展のための教育（ESD）の10年」とすることが決議された。これを受けてわが国では、日本ユネスコ国内委員会や関係省庁が協力し、ESDの推進のため取り組んできたところである。

2 本校におけるESD教育の実践について

本校では、ユネスコスクールとして、国際交流（異文化理解教育及び人権教育）、環境・防災教育、キャリア教育などを柱として、持続可能な社会を築く未来の担い手に必要な価値観をはぐくみ、生徒の自発的、実践的な学習の促進に資する特徴ある教育を実践している。以下、その具体的取り組みについて紹介する。

（1）国際交流分野

[平成23年度]

① メロス言語学院留学生との交流会

平成23年6月14日、ユネスコスクールとしての取り組みのひとつである異文化教育の一環として、外国人留学生との交流会が行われた。これが本校の国際交流の初発である。

メロス言語学院（東京・池袋）から日本語を学んでいる留学生がバスで本校を訪れ、校内見学の後、授業（OCI、生物、地学、音楽・美術・書道）を本校1、2年生と一緒に受けた。メロス言語学院は、1984年設立の日本語教育振興協会認定校であり、日本語の上達のための実践的授業、さらに進学・就職のためのさまざまなカリキュラムに取り組んでいる。韓国、中国を中心としたアジアの国々や、ヨーロッパ、アメリカからの留学生を受け入れているメロスでは、日本語の授業はもちろん、日本事情・マナーといった日本社会に適応するためのレッスンや、書道・茶道をはじめとする日本文化理解レッスンもある。



初めて書道の授業にチャレンジ

基本的に日本語が理解できる学生たちであり、生徒も気兼ねなくコミュニケーションをとることができた。放課後は、今年新たに教職に就いた若手の先生方を交えて、希望生徒によるディスカッション形式の交流を行い、約40人の生徒が、部活動の仲間やクラスを超えた友人とともに参加した。あえてテーマを設けず、思い思いの接し方で互いの国についての情報交換を行った。

本校では、同じ地球に暮らす若者同士が、「隣人」として自然な形での交流活動を続けていけるように、今後もこうした活動を継続することで、生徒の目を世界へと開かせていきたいと考えている。

② 中国高校生との交流会

平成23年10月20日、中国の高校生20名が本校を訪れ、国際交流を行った。これは、文部科学省が主催する「21世紀東アジア青少年大交流計画」の一環として行われたもので、総勢200名の高校生が10月18日から26日まで、8つのグループに分かれて日本各地の高校を訪れるという企画である。本校を訪れたのは、海南省の高校生で、到着後5つのグループに分かれて数学、音楽、OC1、書道などの授業に4、5名ずつ参加した。書道では、特別に用意された篆刻を楽しみ、音楽では一緒に「世界に一つだけの花」を日本語と中国語で合唱するなどの文化交流を行った。



篆刻の授業に取り組む

さらに、2年生の本校生徒とともに、千葉伝統郷土料理研究会講師のもと、保護者など多数の協力を得て、太巻き祭り寿司作りに取り組んだ。生徒も初めて体験で、とまどいながらも中国の高校生と互いに教え合いながら、最後にはきれいなバラ模様の太巻き寿司を完成させ、味わうことができた。その後、吹奏楽部が作製したフォトフレームを記念品に受け取り、次の訪問先である兵庫県に向けて旅立って行った。

③ メロス言語学院学生との討論会

平成24年1月12日に、日本語を学ぶアジアの留学生と本校1、2学年生徒による討論会を行った。メロス言語学院から、11か国46名の学生が来校し、それぞれ代表6名ずつがステージ上でお互いの疑問をぶつけあった。特に興味深かったのは、電車内での携帯電話マナーに見られるように、「他人との間に距離を置く」ことが、日本特有の文化のようだという事。しかし、これが時には「日本人は他人に無関心で冷たい。」と、異文化の国から来た若者には映ってしまうこともある。普段当たり前だと思っていることが、必ずしも世界標準ではないという新たな視点を生徒に与えてくれた。留学生は全員が20代であったが、高校生にとっては身近な文化であるアニメや韓流ブームといった話題では、世代感覚が近いこともあって、会場が大いに盛り上がった。



体育館でのパネルディスカッション

④ 姉妹校韓国忠南高校との交流

平成24年1月5日、姉妹校である韓国忠南高校の生徒8名と教員1名が来校した。本校で、いなり寿司、おにぎり作りの体験と試食の後、本校生徒宅でのホームステイを体験した。8名の生徒はそれぞれ本校生徒と行動を共にし、日本の家庭での生活ぶりを体験することで、より身近に日本を感じることができたようである。本校生徒のみならず、本校保護者にとっても得がたい国際交流の機会となった。



来校した韓国忠南高校生と記念撮影

[平成24年度]

① E-mailを媒体とした交流

アメリカ・カリフォルニア州にあるインターナショナル・スタディーズ・ラーニングセンター

の学生とのEメールによる交流が始まった。コンピュータ教室で本校生徒8名が参加。授業での英語との違いに多少戸惑いながらも、友達と相談しながら自己紹介を懸命にメールにしていた。

本校での国際交流は、前年度アジアを中心に行っていたため、アメリカとの交流はこれからの課題となっていた。このメールでの交流を機会に、留学などへ発展を期待するものである。

[本校から送信された日本語講師アレンさんへのメール紹介]

Dear Andrea, How have you been?

At the end of May, I announced that we are going to have email exchange with your school and recruited students who are interested in exchanging emails with your students. 8 students (1 boy and 7 girls, 1 in the 10th grade and 7 in the 12th grade) gathered in our computer lab and made their introductory mails.

(途中省略) Soon you will have summer holidays and so we know it might be difficult to get replies before that. Anyway we will be waiting for your answers. Best regards.

[アレンさんからの返信メール紹介]

Hello! Thank you for the student letters! We are very excited to start this first step in a student exchange with your school!

(途中省略) They seem very excited about it!

Thank you. Andrea Allen

② インドネシア高校生の訪問

インドネシアの高校生7名と通訳、市川国際交流協会の方々他8名の計15名が本校を訪問。応接室で生徒会役員と自己紹介をかねて挨拶をした。

ようこそ Selma datang (スラマツ・ダタン)

こんにちは Selma siang (スラマツ・シアン)

インドネシアの生徒は日本語で名前、年齢、趣味などを発表してくれた。生徒会役員も調べたインドネシア語を使って挨拶をしたことで、すぐにお互いが打ち解けることができた。

グラウンドの野球部・サッカー部を見学、柔道場では部員とともに記念撮影、体育館ではバスケットボールに興じて、クッキング部のデザートを試食、合唱部の歌を聴いた後はインドネシアの歌をお返しに披露してくれた。作法室では畳で正座をしてお抹茶を飲んだ後、浴衣を着て各自の記念撮影をした。最後は本校マーチングバンドの演奏を鑑賞してもらい、短い滞在の中にあってもできる限りのおもてなしができたことが最大の収穫であった。

③ 韓国忠南高校への教員派遣

前年度の忠南高校生徒の本校訪問を受けて、本校生徒を忠南高校に派遣し、両校生徒の交流を予定していたが、参加人数等の関係で実施を見送ることとなった。しかしながら、交流の流れを絶やさないために、平成24年8月20日、21日の間、本校教頭1名を忠南高校に派遣した。



インドネシア語でのあいさつ



韓国忠南高校校長室で朴校長とともに

忠南高校は男子校で在籍約1,300人、近隣の高校の中では高い進学率を誇り、放課後や休日に補習を実施している。生徒の大半は自転車通学であり、交通機関はバスのみということも本校の立地条件と近いものを感じさせる。また、2、3年生の230名が選択科目として日本語を選択している。忠南高校では朴校長から平成23年度の忠南高校生徒の日本訪問に関する感謝の言葉をいただき、授業見学の後、昨年日本に来た忠南高校の生徒たち8名と意見交換会を行い、「日本の高校生は放課後どのように過ごしているのか。」「校則は厳しくないか。」「日本の高校生は韓国音楽を聴くのか。」などの質問があり、日本に対して好印象を持っているという実感を持たれたことが収穫であった。

④ ホームステイの積極的受入

外務省主催の「キズナ強化プロジェクト」で来日したカナダ・ケベック州モントリオール市にあるトラファルガー女子学校の高校生23名が、市川ユネスコ協会の協力で平成25年1月12日～14日の間、市川市内の高校生宅にホームステイした。本校からも2家族の協力を得て、カミール・ジェーン・コッカートンさん、ミカエラ・フィールトさんの2名がそれぞれ1年生と2年生の家族とともに過ごした。



本校生徒・保護者とともに

「自分の娘が一人増えるような気持ちでカム（カミール）を心待ちにしていた。プリクラを撮り、原宿や渋谷の人の多さや、そこかしこ並ぶ洋服、アクセサリーに目を奪われたようだ。日本の冬の日常生活を味わってもらえた。」

「自分の英語がどれだけ伝わるか不安だったが、共通の話題が大きな助けになった。カナダのことや、生活習慣の違いをお互いに認識することができた。また、カナダにもぜひ遊びに来てとの言葉が、とても嬉しかったので、これからも交流を続けたい。」という保護者の感想をいただき、生徒に交流体験をさせるだけでなく、保護者も含めた国際交流の必要性を感じる機会となった。

⑤ アジア留学生との交流会

平成25年1月17日、メロス言語学院の留学生38名が来校し、1年生全員と交流会を実施した。中国、韓国を中心に台湾、タイ、マレーシア、インドネシア、ネパール、インド、ウズベキスタン9ヶ国の留学生が本校生徒の輪の中に入り、3つのテーマごとにグループを移動して、語り合った。テーマのひとつ「将来の夢」では、留学生の将来の夢を聞きつつ、生徒たちも自分自身の夢を率直に語るなど、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力の開発、向上に資する良い機会になった。



それぞれの「将来の夢」を語る

⑥ 上海市工商外国語学校との交流

平成24年6月に前校長及び日公益財団法人国際文化フォーラムの水口景子氏から、上海市工商外国語学校が日本の学校との交流を希望しており、現在、愛媛県立松山商業高校と交流を行っているが、他の日本の高等学校とも交流を希望しているという話があった。平成25年1月18日に上海から学校関係者4名が本校を訪問し、交流をしたいとの正式な意向を受け、本校校長が3月25日に訪問した。

その折りの話し合いで上海市工商外国語学校から、中国との関係は難しい部分もあるが、生徒、教職員を含めて交流していく価値は十分ある。学校には高等部があり、ほとんどの生徒が大学に進学する程高い学力があり、日本語の専門部もあって日本語が通じるので交流しやすい。また、上海は成田から空路3時間程度と非常に近く、学校は上海中心からも車で40分程度に位置しており、安価な交通費で行くことができる。などの点が確認された。

また、本年7月には上海市工商外国語学校主催のサマーキャンプがあり、中国国内だけでなくドイツ、スペイン、スイス、ロシア、タイ、フランス、韓国等の姉妹校から多くの外国の生徒が集まり、1週間程度中国文化を学ぶとともに交流を図る機会があるので、ぜひ参加して欲しいとの要望を受け、次年度の本校の計画に盛り込むこととした。

[平成25年度]

① 上海市工商外国語学校主催「サマーキャンプ」への参加

平成25年7月21日～28日の7泊8日の日程で、本校校長引率のもと、3年生の女子生徒2名が上海市工商外国語学校のサマーキャンプに参加した。連日気温が38度を超える酷暑と多湿の中、地元中国をはじめ、韓国、ロシア、スペイン、マレーシアの各学校が参加しての行事となった。サマーキャンプの主たるプログラムとしては、太極拳・書道・中国語といった中国文化についての紹介。参加各国の紹介、そして、上海の生徒宅への家庭訪問など盛りだくさんの内容であり、各国の生徒同士のコミュニケーションや、プレゼンテーション能力開発にも力をおいたものであった。当初戸惑っていた参加生徒も、失敗をしながら、徐々にコツやタイミングをつかみ、疲れも忘れ、元気よく、そして満足げな顔で帰国してくれた。一人でも多くの生徒に自信とグローバル人材育成につながる体験をさせるために、今後とも継続したい取り組みの一つとなった。



サマーキャンプに集った各国生徒

② 地域の理解 —カリフォルニア州ガーデナ市高校生との交流—

平成25年8月2日、市川市の姉妹都市カリフォルニア州ガーデナ市の高校生が来校するのに合わせ、本校の部活動の演奏や交流会様の様子を地域住民の方々に公開するとともに、学校の教育活動状況に関して率直な意見や感想をいただく機会とした。カリフォルニア州ガーデナ市の高校生や、引率・関係者25名、及び地域住民や保護者65名の前で、合唱部10名、ダンス同好会約80名、吹奏楽部約50名、総勢140名近くの本校生徒による演奏や発表を披露した。ガーデナ市高校生は、



ガーデナ市高校生を歓迎する生徒

食い入るようにパフォーマンスを見ていた。「自治会行事などでも、それぞれの部や同好会が歌・ダンス・演奏を披露してくれています。」(地域)、「多くの生徒が関わり、参加できる機会にしたい。」(保護者)、「おもてなしの姿に一生懸命さが伝わる交流会だった。」(実行委員)などのご意見をいただき、日程を終了した。

学校の特色ある取り組みを地域の方に見てもらい、学校や生徒を理解していただくとともに、

地域行事などにも積極的に参加する双方向の交流も学校の発展には必要不可欠な要素である。地域に愛される学校となるためにも、今後さらなる地域との交流の推進に努めたい。

(2) 環境・防災教育分野

[平成23年度]

① 地域清掃ボランティア活動と防災学習成果発表会

平成23年10月30日、学校周辺地域の清掃ボランティア活動を実施した。複数の部活動部生徒80名により、地域から要請のあった道路や公園のゴミ拾いや除草を行った。

また、水害に関する防災講話、生徒による防災学習研究成果発表会も併せて開催された。本校は国分川、春木川に挟まれた立地にあり、昭和50年以降は年に1度の割合で水害が起きていた。昭和54年「総合治水対策特定河川事業」により治水対策が進み、平成6年「国分川分水路」が完成したこと

で、近年洪水の被害は激減したが、潜在的な水害の危険性がある。「2つの川に囲まれたわが高校～地域と共に防ごう・助けよう・考えよう～」をスローガンに掲げ、自助・共助の意識を生徒が常に持ち得るよう実践に努めたい。



国分川沿いの遊歩道を集中的に除草

[平成24年度]

① 近隣小学校との防災教育の実践

平成24年7月10日、首都直下地震を想定した市川市立百合台小学校の引き渡し訓練に、本校3年生とボランティア部の計63名が参加した。校庭に避難した小学生が地区別のプラカードを持った本校生徒のもとに集合した。手をつないで、目線を小学生の高さに合わせ、優しく誘導する本校生徒に、地域や保護者の方から多くの感謝の言葉をいただいた。

② 沖縄修学旅行における琉球大学との連携による環境プログラム

平成24年10月5日、2学年の沖縄修学旅行におけるプログラムとして、琉球大学での講義、「地元企業のエコ活動の学習」、「やんばる海水揚水発電所見学」などの環境教育に挑戦し、新しい修学旅行の形を作り上げることができた。今回の修学旅行の大きな特徴は、テーマ学習であり、従来の平和学習や沖縄の自然・文化体験のほか、環境学習を新たなテーマに加え、「学習をする旅行」の位置づけを明確にした。この環境学習では、千葉県内初の試みでもある、国立琉球大学での環境関連講義の受講コースと、海水を利用した発電システムという日本で唯一の施設を持つ「やんばる揚水発電所」見学コースをクラス単位で選択し、さらに環境対策に取り組む企業を見学するといったプログラムを組んだ。指導された琉球大学の先生方はじめ、実施先の皆様から、本校生徒の参加態度や意欲をお褒めいただき、生徒たちにとっても環境問題を身近に感じる充実した体験となった。



琉球大学での講義風景

[平成25年度]

① 百合台小学校との防災教育実践（2）

平成25年7月16日、昨年度に引き続き、百合台幼稚園及び百合台小学校の引き渡し訓練に本校3年生34名が参加した。つながる手に幼い子どもたちの命の重みを感じ、生徒一人一人が責任の重さと共助の気持ちを強く自覚する恒例行事となった。



子どもの目線でやさしく伝える

（3）キャリア教育分野

[平成23・24・25年度]

① 官民学連携によるキャリア教育ガイダンス

平成23年度から9月下旬を目途に、官民学連携による高校生への「社会人の基礎力教育」及び「キャリア教育」の一環として、東京ベイ信用金庫、VAICコミュニティケア研究所、千葉県財務事務所の協力で本校1年生全員を対象としたキャリア教育ガイダンスが開始された。午後の2時間を確保し、体育館での全体会において、「多重債務」の恐ろしさや実践的な金銭教育を専門家の講義を中心に学んだ後、当該年度の東京ベイ信用金庫の新入社員の皆さんによる教室でのグループ討議を行うという企画である。生徒たちは新入社員から進路選択や勉強の仕方、就職活動から入社までの経験を直に聞きく良い機会となり、金融機関への興味はもとより、現在の自分と身近な将来の自分を想定できるとあって生徒にも好評なことから、今後も引き続き継続実施の予定である。



東京ベイ信金のフレッシュマン

3 おわりに

これまで紹介した取り組み以外にも、第47回生徒地理研究発表大会における「北海道阿寒湖の生物多様性」、「サンゴの生物多様性」と題した2つの生徒グループによる成果発表や、日常的なボランティア活動の実践、さらにPTAでも、今年度からユネスコ委員会が新たに発足し、学校の取り組みとともに留学生の受け入れや日本文化の紹介などに積極的な活動を行うなど、保護者の理解とサポートを得ながら、着実にESDを推進しつつある。特に東日本大震災直後の我が国にあっては、今後日本が相互扶助の精神で立ち直っていく原動力となる若者の育成のために、ESDを学校教育の柱と位置付けた取り組みが不可欠と思われる。

しかしながら、本校がユネスコスクールとして、今後大きくESD教育を推進していくためには、次のような改善点の克服が必要であると考えている。

- ・イベント的な取り組みだけでなく、日常の教育活動の中で積極的に取り入れていく。
- ・個や小集団の活動を全員での活動へ発展させる。
- ・個々の活動についての成果発表の機会を設ける。
- ・キャリア教育の一環としてのESDのあり方の検討及び実践。
- ・学校HPや報道機関等とのタイアップによる広報活動の充実。

本校は、ユネスコスクールとしてESDに取り組み始めて、まだ緒に就いたばかりであるが、教育を受ける生徒は、国際交流、環境・防災教育、キャリア教育それぞれを別々なものとして実践しているという印象であり、諸要素が統合した形で結びついたユネスコスクールとしてのESDに取り組んでいるという実感は薄いと言える。しかし、今後ユネスコスクールとしての学校文化の継承がなされ、その取り組みが地域貢献や社会貢献と結びつくものとなれば、生徒たちは、自己の課題解決能力や自己肯定感の向上にもつながることを知り、ESDのもたらす成果を実感できると確信している。

さらに、英語をはじめとした教科への興味や、将来の進路への関心につながれば、キャリア教育としても価値ある実践となる。他のユネスコスクールとの協働も含めて、今後とも学校経営の中心として、E S Dを実践していきたい。